

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 10 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：平成 21 年 4 月 1 日～平成 24 年 3 月 31 日

課題番号：21530590

研究課題名（和文）：介護施設において高齢者・介護職員間で交わされる身体動作を用いた空間表現の研究

研究課題名（英文）：Gesture in spatial description between the elderly and caregivers in nursing home.

研究代表者：細馬 宏通 (Hosoma Hiromichi)

研究者番号：90275181

研究成果の概要（和文）：

介護空間における高齢者と介護者との身体を用いた相互行為について、デイケアセンターにおける回想法場面、グループホームにおける介護場面、グループホームにおける介護者どうしのカンファレンス場면을観察し、分析を行った。高齢者や介護者の知識や考えはことばに現れにくい身体動作によって表れており、空間内のものやできごとを手がかりとしている。彼らは、その場の手がかりを用い、お互いに相手の動作を真似たり改変したりながら、やりとりの中でお互いの知識や考えを更新していくことが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, we analyzed interactions between the elderly and caregivers in caregiving space: life review sessions in day care centers, caregiving behaviors in nursing home and monthly conferences in the home. Knowledge and thought without words often expressed using body movements which depend on the arrangement of objects and events in the nursing space. The elderly and caregivers use such arrangement as resources to imitate or transform their behaviors each other for updating their mutual knowledge and thought.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1700,000	510,000	2210,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	1000,000	300,000	1300,000
総計	3400,000	1020,000	4420,000

研究分野：社会福祉学

科研費の分科・細目：

キーワード：グループホーム、コミュニケーション、ジェスチャー、会話分析、回想法、空間参照枠、認知症、高齢者行動

1. 研究開始当初の背景

複数の人々が日常のコミュニケーションで行う身体動作は、ことばで交わされる会話内容と並んで重要なものである。とりわけ、事物や人物の配置や場所を示す動作は、談話の内容を把握したり、お互いの意思疎通を図るための重要な手がかりとなりうる。

しかし、身体動作は、ことばに比べて指示対象や意味内容があいまいなこともあって、コミュニケーションにおいてどのような性質を持っているのかについて、必ずしも深く調べられてきたわけではない。この限界を乗り越えるため、社会心理学的研究では、話し手の動作をいくつかのカテゴリーに分けて

その頻度を調べ、話し手の性格や話し手に対する印象との相関を調べているアプローチが採られてきた。こうした方法は、動作の持つ傾向や性質を示すのに適している一方で、その動作をどのような文脈において、どのようなタイミングで発することが重要なのが考慮されていない。

これに対し、実際の会話における動作の連鎖を、時間を追って注意深く調べる研究は、Kendon(1969)、Goodwin(1981)やMcNeill(1992)を始めとする身体動作の研究によって行われてきた。彼らの研究は近年のコンピューターを用いた映像・音声分析の発展とともに注目されるようになり、2002年には国際ジェスチャー学会が発足し、コミュニケーション研究者のみならずロボティクス研究や手話研究の分野からも研究者が集い学際的な発展を見せつつある。ジェスチャーの時空間構造を調べるための具体的な分析方法も、映像分析の発達によってようやく整備されてきた。

人の身体動作がどのような空間を表現しているかを調べるためには、表現された空間がどのような参照枠（座標軸）を取っているかが問題となる。従来、参照枠は、すでに行われた身体動作を解釈するための概念として用いられてきた(Levinson 1996)。しかし、実際のコミュニケーション場面では、あらかじめ決められた参照枠が存在するわけではなく、連鎖する動作によって徐々に参照枠は表される。この過程を考えるには、実際にやりとりされる空間表現がどのような参照枠を生みだし、もし参照枠に変更や矛盾があった場合にどのような修復が為されるかを調べる必要がある。

身体動作は、手がかりのない抽象的な空間の上で行われるとは限らない。その土地に長く暮らしてきた人々は、川や谷、寺社や家々、木々の配置といった周囲の事物を巧みに身体動作で表しながら、語られつつある空間の参照枠を明示し、言語化されないできごとまでジェスチャーによって表す。過去の経験は、身体動作のスケールを変えながら参照枠を一定させることで、その土地の環境と結びついて物語られる。

このような身体動作によるコミュニケーションは、介護施設で生活する高齢者の会話にも頻繁に見られる。デイケアセンターで車座になって過去を回想する高齢者たちは、互いのジェスチャーを真似、改変しながら、ことばだけでは想起しにくいできごとを思い出すことがある。また、こうした会話をフォローする若い介護職員たちもまた、高齢者の動作を真似ることで、会話に参入し、会話を活性化することがある。

重度の認知症入居者を扱うグループホー

ムにおいても、空間を表す身体動作は重要な意味を持つ。たとえば、食事の介護において、卓上の食べ物のどれを次に食べるか、それは嚥下可能なものかどうかといったやりとりを行うとき、入居者のわずかな動作が、入居者の意志を知る手がかりになっていることがある。

以上のように、高齢者の空間表出行動は、日常生活のさまざまな場面に埋め込まれ、コミュニケーションに役立っていることが予想される。本研究では、こうした表現が、実際の介護場面で、介護者と入居者とのあいだでどのように用いられ、それがお互いのどのような行動へとつながっているかを明らかにすることを旨とする。

2. 研究の目的

従来のジェスチャー研究の多くが、大学生を被験者としたものであるのに対し、本研究は介護者・高齢者の日常生活におけるジェスチャーにどのような特徴があるかを明らかにし、それがグループホーム空間でどのように機能しているかを確認することを目的とする。

認知症が進行しつつある高齢者では、ことばの想起に困難になる、見当識が鈍るなどの傾向が見られることが知られている。が、こうした傾向は、従来、言語コミュニケーション（たとえば名前や場所を聞く）をもとに認定されてきたし、ケアする側も、言語コミュニケーションの困難の度合いによって対応を決めることが多かった。しかし、これまでの予備的観察では、たとえ発せられることばに淀みや言い直しがあっても、本人の動作は適切な行為を示しており、それにケアスタッフ側が気づいていない例がしばしば見られる。こうした現象は、身体動作に注目することで初めて明らかになる。

一方、高齢者の生活を24時間介護している介護者たちにとって、高齢者の行動や介護行動をうまく表現し、お互いの行動を学び合うことは重要である。しかし、医療行為とは異なり、介護行為の多くは、入居者と介護者との身体相互行為に支えられており、その内容は入居者の個人差によって大きく異なり、言語化されたやり方だけでは伝えるできない側面を多く抱えている。また、事物や人物の配置、場所によっても、介護行為の内容は左右される。では、介護者たちは、このような複雑な介護行為をどのようにしてお互いに伝え合い、その内容を理解し合っているのだろうか。本研究では、こうした介護者間で起こる介護行為の伝え合いのプロセスを明らかにすることも目指す。

3. 研究の方法

本研究はグループホーム、デイケアセンターにおける参与観察とビデオデータの取得、ビデオデータの分析、分析結果を用いたアクション・リサーチ、アクション・リサーチ後のフォローアップの各段階に分かれる。

参与観察によって、現場の持っている特性やそこで用いられている背景知識、経験知をできるだけ洗い出す。次にビデオデータのマイクロ分析によって、日常の微細な身体行動に埋め込まれている空間表現をコード化し、介護者と入居者との間でそれがどのようにやりとりされているかを分析する。次に、分析結果に基づき、アクションリサーチを行い、現場の介護者とのミーティングを通して、分析で得られた知見を利用する方法を模索する。

4. 研究成果

【相互行為空間内のマルチモーダル分析】 (論文1, 4, 6; 学会発表2, 5)

空間内で複数の参加者がどのような行為連鎖を用いて相互行為を実現しているかについて、微笑と笑い、ジェスチャーの微細な内部構造に注目して分析を行った。これらから得られた表現モダリティ間での連鎖構造の違いや、動作単位の違いは、下記の高齢者行動の分析、回想法における相互行為分析、逸脱行為の分析、介護空間における介護者行動の分析で用いられている。

【高齢者の立ち上がり行動】 (論文2)

アルツハイマー型認知症では記憶だけでなく、高次脳機能（実行機能）に問題を生じることが多い。行動の理由付けや意思決定が困難になり、長期の、ときには短期の目的志向型行動を維持できなくなる。これに関連して、アルツハイマー型では、視覚的注意が容易に手近なものによってそらされてしまいやすいことが指摘されており、とりわけ複数の事象に注意を分散させる分割的注意に問題があるとされている。

この問題を高齢者と介護者とのやりとりから考えるべく、グループホームにおける高齢者の立ち上がり行動の事例を詳細に分析した。その結果、高齢者の注意の方向付けは、ランダムではなく、周囲からの声かけによって相互行為的に産み出されていることがわかった。

高齢者の視線は、介護空間における複数の話者に次々と注意を向けたり、目の前の事物に素早く注意を切り替える。しかし、実際に立ち上がるために必要なのはこうした素早い注意変化ではなく、むしろ注意を目の前の事物や人物からそらせて立ち上がりのための動作に集中することである。

こうした困難を解消するために、介護職員はいくつかの方法を採っている。ひとつは、高齢者が注意を向けている事物について、高齢者に短期的なゴールを提案して解決してもらい、そのあとで立ち上がってもらうことである。たとえば、立ち上がる前にお盆を持つことに注意を向けてしまった高齢者は、お盆を両手で持つことにこだわるために、両手を机について立ち上がる行動に移れない。このとき、介護者は、高齢者が持ったお盆を別のテーブルに置くよう依頼する。別のテーブルに置くことは、それは単にお盆を戻すのではなく、移動させるという目的を志向している。おもしろいことに、この、別テーブルに置くという目的が達成された瞬間に立ち上がりをうながすと、高齢者は立つことができる。

もう一つの方法は、高齢者の注意を、事物から介護者へとさりげなく誘導することである。たとえば、高齢者が机の上のふきんに注意を向けて立ち上がるうとしないとき、介護者は、高齢者と机の間に体を入れながら高齢者の背中を押す。すると、高齢者の目からふきんが見えなくなるとともに、前傾姿勢になり、体重を前に倒して立ち上がるための準備が整う。

このように、目的志向型行動から注意をそらされてしまった高齢者に対して、介護者は事物の空間配置を調節しながら注意のナビゲーションをタイミングよく行い、再び目的志向型行動へと高齢者を誘っていることがわかった。

【回想法における高齢者と介護職員との相互行為】 (論文7)

参加者が過去の体験を話し合うグループ回想法は、従来、認知症の予防の側面から語られることが多かった。本研究では回想法をむしろ、高齢者と介護職員との発語と身体とを介した相互行為として捉え、高齢者の知識がいかに身体的に表現され、それがどのようにして他の参加者や介護職員に理解されているかをマイクロ分析した。その結果、グループ回想法のリーダー役である介護職員は、視線変化や身体姿勢の変化を用い、コ・リーダー役とともに、次にどの高齢者が話を始めるかを微細に調節していることがわかった。一方、高齢者の過去の体験に関する知識は、高齢者の微細な動作に表現されるが、それは必ずしも介護職員の注意を惹いておらず、見過ごされることがある。一方、同様の過去の体験を持っている他的高齢者参加者は、こうした微細な動作を観察し、自らもそれを真似ることで、あらためて介護職員の注意を促していることがわかった。身体動作に埋め込まれたこうした知識の伝達は、延長ジェスチャ

一、模倣ジェスチャー、相互行為的キャッチメントといった、ジェスチャー研究の概念によって記述できることもわかった。

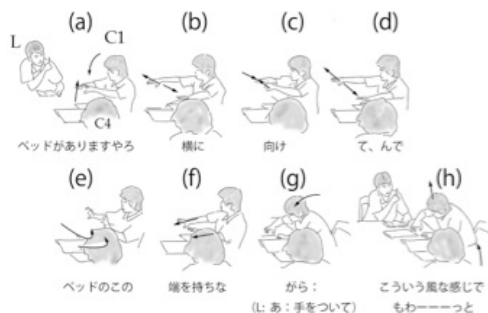
【高齢者の「逸脱行為」を介護者や観察者はどのように相互行為の中に組み込むか】
(学会発表 4)

レクリエーションや食事場面など、高齢者どうしの相互行為を観察していると、一見わたしたちの日常生活からは逸脱してみえる行動が観察される。たとえば、ものの受け渡し場面で、ものを渡さずに抱え込んでしまったり、配られたものを衣服の中にしまいこんだり、決められた場所ではないところへ移動するなどである。しかし、こうした「逸脱」的行動をただ矯正するのではなく、むしろそこに相互に意味を見出すことで解決する相互行為が、介護場面ではしばしば観察される。たとえば、Aさんがパーティーで配られた名札を衣服の中にしまいこんでしまう場面で、介護者は名札を出すようにうながすかわりに「(Aさんが名札を) 大事にしている」と発言することで、Aさんの行為に別の意味を持たせる。また、Aさん以外の人の名札の扱いにも触れながら「(みんなそれぞれの方法で) 大事にしている」と語る。こうしたやりとりは、ただ発話のみによって行われるのではなく、名札をしまいこもうとしたり、しまいこんだ名札を衣服の上から触る入居者の行動、そしてそれを指し示し真似る介護者の行動と連鎖している。このように、高齢者の行動が「逸脱」ではなく日常生活にとって意味のある行動として捉え直されるときには、こうした発話と身体動作がタイミングよく組み合わせられて相互行為を組織化されていることがわかった。

【介護者どうしが身体を用いておこなう介護行為の表現】
(論文 3, 5, 8; 学会発表 3)

高齢者用グループホームで行われるカンファレンスでは、介護者が報告中に過去の介護行為や入居者の行為をジェスチャーを用いて説明する場面が多発する。

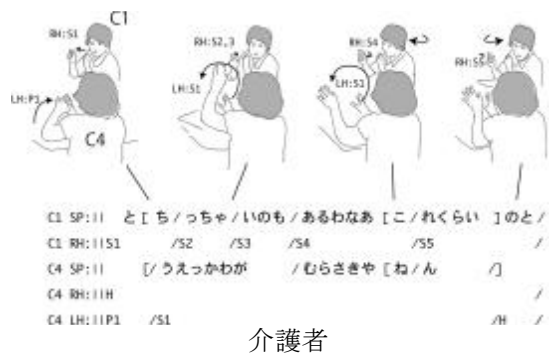
入居者のベッドからの立ち上がり行動を記述する
介護者



こうした場面では、成員どうしは単に言語を中心にした解釈だけではなく、身体動作も含むドキュメンタリ的解釈法によって現実を構成していると予測される。では、介護者は身体を用いたドキュメンタリ的解釈法、すなわち「身体的解釈法」をいかに実践しているのだろうか。

この問題を明らかにするため、一人の介護者のジェスチャーを含む発話に対してもう一人の介護者がジェスチャーを用いて発話を連鎖させ組織化を行っている場面についてマイクロ分析を行った。その結果、先行ジェスチャーに続くジェスチャーでは、先行ジェスチャーの構造の一部が繰り返されることでキャッチメント構造を形成し、新たな解釈をしていることがわかった。また、繰り返される構造には、介護方法や入居者の身体に関する、発話には含まれない知識が埋め込まれていることがあることがわかった。従来、個人内のジェスチャーを産む過程として提出されていたキャッチメントの概念は、実は個人間の相互行為に開かれており、介護者間で交わされるキャッチメントは、異なる個人のジェスチャーどうしを発話とともに関連づけ、身体的解釈法の実践に重要な意味を持っていた。

入居者の身体についての傷の位置について
身体動作を用いてディスカッションをする



【介護空間における介護者の空間表現】
(学会発表 6)

少人数制のグループホームには、従来じられてきた作業空間とは異なる興味深い性質がある。それは、介護者どうしのカンファレンス空間と、入居者の生活空間とが、二重に折り重なっているという点である。いくつかのグループホームでは、カンファレンスは特別な会議室では行われず、入居者の使う食卓やレクリエーション用テーブルで行われる。つまり、介護者どうしの話し合いの環境は、入居者と介護者とが普段生活している環境でもある。こうした二重のカンファレンス環境において、介護者はいかに生活の中の行為を指し示すだろうか。そこには介護者のとるどのような方法が観察できるだろうか。本研究では、この作業空間の二重性が相互作用に

もたらず問題を探るべく、カンファレンス中に二重環境が利用された発話連鎖をいくつか取り上げ、分析を試みた。

介護者は、いつもそこに座っている入居者と自分たちとを重ね合わせるようにお互いの身体や位置を指し示し合う。部屋に設えられたテーブルと椅子の配置からは入居者のいつも座る位置が簡単に想起され、この位置は、当のテーブルでかつて行われた入居者の行動を記述する際に用いられる。さらに、おもしろい点は、こうした行為を通して、入居者の座席に座った者どうしがあたかも入居者のエージェントであるかのように扱われる点である。たとえば、介護者Aが、入居者X、Y間の相互行為に言及しながら、入居者Xの行動を真似て、別の介護者Bに視線を移動させる。すると、視線を向けられた介護者Bは、あたかも入居者Yであるかのように他の参加者からは見える。また、B自身もAの視線をあたかもXからの視線であるかのように受け取り、Yの行動を真似る。このように、介護者は入居者の生活する物理的空間内で動きながら、実際に入居者の行為を記述することによって、お互いの身体を介して、入居者どうしの感覚を再現し、入居者の生活に近づくことがわかった。

【アクション・リサーチ】

(図書1)

上記で得られたさまざまな介護場面の行動には、介護職員の言語化されない身体的な介護知識が埋めこまれている。こうした知識は必ずしもすべての介護職員に共有されているわけではなく、初心者介護職員には知られていない方法が数多くふくまれている。これをわかりやすい形で介護現場に還元すべく、2011年より雑誌『訪問看護と介護』に「介護のことば 介護のからだ」を連載している。また、この連載記事をもとに、訪問先のグループホームで介護行動についてディスカッションを行っている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ① Hosoma, H. *Preliminary Notes on the Sequential Organization of Smile and Laughter.* H. Hattori, T. Kawamura, T. Ide, M. Yokoo, Y. Murakami (eds.): JSAI 2008, LNAI 5447, pp. 288-293, 査読無、2009, Springer-Verlag Berlin.
- ② 細馬宏通, 中村好孝, 城綾実, 吉村雅樹, 認知症高齢者はいかに立つことを了解するか - 介護施設における立ち上がり行動の会話とジェスチャー-, 社会言語科

学会第25回大会発表論文集、査読無、2010、pp. 142-144.

- ③ 細馬宏通, 中村好孝, 城綾実, 吉村雅樹, 介護者どうしの会話に現れる身体化された知識 -カンファレンスにおけるジェスチャーの相互作用-, 信学技報 IEICE Technical Report HCS2010-29 (2010-8)、査読無、2010、pp. 13-18.
- ④ 城綾実, 細馬宏通, 話し手は誰に向けて話をしているのか? -体験を共有した2人が未体験者に離す場合- 社会言語科学学会第26回大会発表論文集、査読無、2010、pp. 78-81.
- ⑤ 細馬宏通, 中村好孝, 城綾実, 吉村雅樹, グループホームでの介護者間の身体動作を産み出す環境 -カンファレンスにおける語り- 社会言語科学学会第26回大会発表論文集、査読無、2010、pp. 166-169.
- ⑥ 細馬宏通, 富田彩加, うなずき運動とあいづちとの相互作用、身体知研究会、SKL-09-02、査読無、2011、pp. 13-18.
- ⑦ 細馬宏通, 考えを表しあう身体-会話のなかのジェスチャーと身体動作-, 日本語学、査読無、Vol. 31, No. 3, 2012.
- ⑧ 細馬宏通, 身体的解釈法 - グループホームのカンファレンスにおける介護者間のマルチモーダルな相互行為 -, 社会言語科学、査読有、印刷中。

[学会発表] (計6件)

- ① 細馬宏通 2010 アルツハイマー型認知症高齢者の立ち上がり行動 JSAI2010 人工知能学会大会 (長崎)
- ② Hiromichi Hosoma 2010 "Extended gesture unit and adjacency pair" The 4th Conference of International Society of Gesture and Speech (国際ジェスチャー学会) Frankfurt der Oder, Germany
- ③ 細馬宏通, 吉村雅樹, 中村好孝, 城綾実 2010 読むことと話すこと - 介護施設のカンファレンスにおける身体動作の相互作用 - 質的心理学会第7回大会 2010年11月27日, 茨城大学 (ポスター発表賞)
- ④ 城綾実・細馬宏通・中村好孝・吉村雅樹 2010 ちょっとした「逸脱」行為に柔軟に対応する実践とは何か-グループホームの会話場面を例にして-, 日本認知科学学会第27回大会、P1-39 (CD-ROM), 2010年9月, 神戸大学
- ⑤ Ayami Joh, Hiromichi Hosoma 2011 "Simultaneous Gestural Matching through Catchment Structure" IPrA (国際語用論学会大会) Manchester, UK
- ⑥ 細馬宏通 2012 介護の自然記述と介護空

間 社会言語科学会第 29 回大会, 桜美林
大学

〔図書〕(計 1 件)

細馬宏通 2011 連載「介護することば 介
護するからだ」第 1 回 真似で関係が動き出
す 訪問看護と介護 16 巻 8 号
(2011.08) pp.680-681 (現在 17 巻 7 号 12
回まで連載中)

〔産業財産権〕(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.shc.usp.ac.jp/hosoma/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細馬宏通 (Hosoma Hiromichi)

研究者番号 : 90275181

滋賀県立大学人間文化学部

(2) 研究分担者

中村好孝 (Nakamura Yoshitaka)

研究者番号 : 20458730

滋賀県立大学人間文化学部

(3) 連携研究者

城綾実 (Joh Ayami)

滋賀県立大学人間文化学部

吉村雅樹 (Yoshimura Masaki)

H21-22 京都工芸繊維大学→H23 無所属